

研究論文

縄文後晩期の近畿地方における小型石棒類の文様変遷

小野大輔

要 旨

小型石棒類は縄文後晩期に全国的に出現する呪術具と考えられる棒状の石製品である。かつて全国的な分類がなされ、その中で近畿・東海地方を中心に展開する型式として設定された「榎原型石刀」は、榎原文様との類似性が指摘され、同時期に盛行したと考えられた。その後、榎原文様の時期的な位置付けは研究の進展で大きく変化し、それに伴って榎原型石刀の年代観も変化していったが、明確な消長は示されずにいた。しかし近年、榎原文様終焉後の晩期中葉に位置付けられる榎原型石刀の存在が指摘され、同時に小型石棒類において榎原文様が保存された可能性が指摘されている。この指摘を含め、晩期の無文化と呼ばれる事象について取り扱うには、小型石棒類における文様の変化をとらえる必要がある。そこで、指摘の資料が存在する近畿地方において、小型石棒類における文様の変遷の提示を試みた。

検討の結果、榎原型石刀として扱われてきた有文無頭小型石棒類は、晩期中葉まで継続することが明らかになった。また、晩期前葉と中葉で文様構成に大きな変化があることも明らかになり、榎原文様が用いられた晩期前葉からの文様構成を小型石棒類において引き継いでいるかは更なる検討を要する結果となった。一方で、有文無頭製品の終焉と前後して出現する有文有頭製品には榎原文様との共通点が多岐にわたる製品の存在が指摘できる。ただし、類似するという点で榎原文様と榎原型石刀を同時期に比定できないことが明らかになった現在、異なる製品においてどこまでを同一の文様と捉えるかについては慎重になる必要がある。

キーワード：縄文時代 小型石棒類 榎原文様

はじめに

石棒においては、呼称に差はあるが石棒を大型と小型に分け、さらに横断面形状が片刃状のものを石刀、両刃状のものを石剣と呼ぶのが、現在では一般的である。これらの分類は鳥居龍蔵や八幡一郎の設定した基準が基となっている（鳥居 1924、八幡 1933、1934）。また、大野雲外は小型石棒、石刀、石剣を併せた分類の検討を行い（大野 1908）、現在では小型石棒、石刀、石剣の3種が大型石棒と一線を隔し、小型石棒類や刀剣形石製品などと総称されて扱われることが多い。これら小型石棒類の詳細な分類については、後藤信祐が行った全国的な集成と分類が基盤となっている（後藤 1986、1987）。後藤氏はこの中で「榎原型石刀」を設定した。そして榎原文様との関連を指摘し、両者は併行する時期のものとしている。一方で、近年では必ずしも榎原文様の存続時期と併行しない製品の存在が近畿地方で指摘されている。本稿はこのような指摘を踏まえ、近畿地方における小型石棒類の文様変化を検討するものである。

1. 研究史の整理と課題

(1) 研究史

重複する箇所もあるが、現在の型式設定を確認するためにも、あらためて研究史を示す。小型石棒類の研究は大野氏以降、戦後まで低調であったが、東北地方の石刀を皮切りに再び扱われるようになる。近畿地方について、泉拓良は近畿地方出土の小型石棒類が、東日本のものと比べて特異であることを指摘した（泉 1985）。泉氏は直線的な形態を持ち、柄部に直線や斜格子、弧状文を線刻するものを「近畿型石剣」と称した。その後、後藤氏によって全国的な集成と分類が行われ、各地方の概要がおおよそ把握できるようになった。後藤氏によれば、近畿地方では東正院型石棒¹⁾が後期前葉から中葉にかけて少数現れ、後期末から晩期初頭になると榎原型石刀（a型）²⁾が主体となる。そこには、若干の山本新型石刀³⁾が含まれ、凸帯文土器出現期には消滅することが示された。後藤氏の全国的な型式設定と変遷の提示以降は、地方に限定した研究が主流となる。近畿地方では秋山浩三や、寺前直人によって小型石棒類の変遷が示されている。

秋山氏は後期から晩期の石刀について横断面形状を

基にその変遷を示した。石刀の横断面形状は、後期においては形状に統一性がないものの、晩期前・中葉にかけて左右対称の形を示す「定形化」が進み、晩期後葉には定形化が崩壊するというものである（秋山 1991）。これにより、破片資料が多い近畿地方の石刀について大まかな年代決定が可能となった。

寺前氏は、弥生時代の「小形石棒」の存在を検証することを目的に晩期前半から弥生時代にかけての小型石棒類の変遷を示した。近畿・東海地方を対象として、文様、頭部形状、精粗を基にして分析を行い、晩期前・中葉に複雑な文様を持つ精製品が盛行し、晩期後葉以降は単純な文様や無文の粗製品が継続することを示した。また、所謂櫃原型石刀は、晩期前葉に限定される可能性を指摘した（寺前 2018）。

（２）課題

これまでの研究により、近畿地方では小型石棒類の変遷がある程度明らかで、大まかな時期比定も可能である。また、晩期を通じた文様変化の傾向も示されている。ただし、時期の段階が主に晩期前・中葉と中葉・後葉に２分するなど、櫃原型石刀自体の変遷や寺前氏の示した複雑な文様の精製品が盛行する晩期前・中葉における変遷は未だ不明瞭である。筆者は次の観点からこの点を検証する必要があると考える。

櫃原型石刀の時期比定に関して、後藤氏は明確でないことは断った上で、土器に施される「櫃原文様」と関連させ、後期末葉から晩期中葉に位置付けた。その後の研究で、櫃原文様は概ね滋賀里Ⅱ式に限定され、一部は滋賀里Ⅰ式まで遡る可能性が示された（大塚 1995）。この櫃原文様の消長について、宮地聡一郎が次のような指摘している。宮地氏は、晩期後葉に九州南部で認められる干河原文様について、櫃原文様との関連を指摘している。そして二者の時間的な隔たりを繋ぐものとして、木器等に文様が保存されていた可能性を指摘した。その中で、晩期中葉に比定できる櫃原型石刀が存在することから、石刀に櫃原文様が保存された可能性を指摘している（宮地 2017）。一方で、寺前氏が櫃原型石刀が晩期前葉に限定される可能性を指摘するなど、櫃原型石刀の消長には未だ議論がある。櫃原型石刀は、後藤氏が「把部に数条の沈線をめぐらすもののほか、斜線文、斜格子文、綾杉文、弧線文、連結三叉文などが施され直刀を基本とする」と定義したように、様々な意匠のものが含まれていることを考慮すれば、文様がどのように変化したのか把握した上で検証される必要がある。

以上の観点から、櫃原型石刀の時期比定においても、晩期の無文化と呼ばれる現象の実態を明らかにする点においても、小型石棒類における文様の変化を明らかにする必要がある。本稿ではこれらを解決する一環として、晩期中葉の櫃原型石刀の存在が指摘された近畿地方において有文小型石棒類の文様変遷の解明を試みる。

２．研究の対象と方法

（１）研究の対象

対象は近畿２府４県で出土した有文小型石棒類である。ここで言う有文小型石棒類には、単に横位沈線を数本刻む製品は含めず、繁褥な文様を持つものを対象とした。また、小型石棒類の基準には議論があるが、近畿地方においては幡中光輔によって基準が検討されている（幡中 2010）。本稿もこれに従い、原則として横断面の長さが 5 cm 以下のものを小型石棒類として集成を行った。資料数は 26 遺跡計 52 点である（図 1）⁴⁾。

（２）研究の方法

既に述べたように、櫃原型石刀と櫃原文様が必ずしも同一時期のものと扱えない可能性が指摘されている。従って、現状では小型石棒類の文様と土器など他の製品に施された文様の変化を同一に考えるべきではなく、あくまでも小型石棒類の文様を本位として文様変化の検討を行った。検討にあたっては、基本的には集成資料の中でも施文部が概ね完存し、文様構成が明らかなるものを対象とした。また、近畿地方で出土する小型石棒類は、包含層や河道跡から出土したものが多いため、共伴土器が広い時期にわたり、帰属時期を絞り込めない例も少なくない。そこで本稿では、対象の小型石棒類が出土した遺跡や調査における土器の出土量を念頭に、帰属する可能性が高い時期をできる限り絞り込むこととした。以上を踏まえ、ある程度の幅で時期決定が可能な資料を基に文様の関連性を検討し、小型石棒類における文様変化の提示を目指した。

３．文様の分類

対象資料を分類すると、大きくは頭部を持つものと持たないものに分類できる。本稿では前者を無頭製品、後者を有頭製品と称する。また、文様が多岐に渡る無頭製品は、文様構成で分類を行った。具体的には、ある 1 種の文様を施文するものを単体文とし、Ⅰ～Ⅴ類に分類した。また、Ⅰ～Ⅴ類の文様を組み合わせるものを複合文とし、それぞれⅠ－Ⅱ類のように単体表

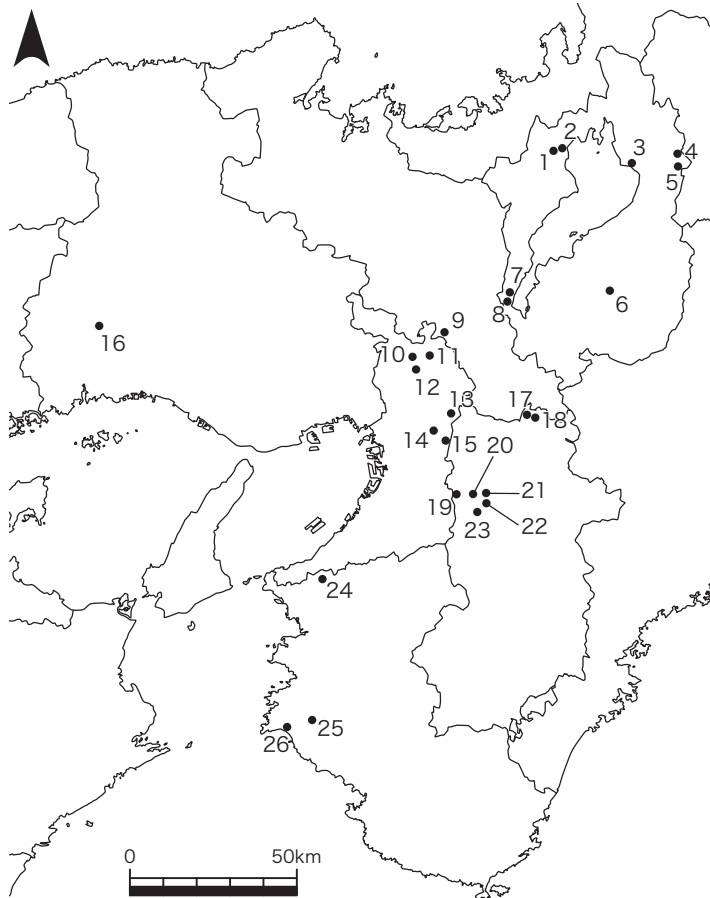


図1 対象資料の分布と資料一覧

番号	遺跡名	対象資料数	出典
1	弘部野	1	1
2	北仰西海道	2	1、2
3	宮司	1	3
4	伊吹	1	4
5	杉沢	1	5
6	麻生	1	6
7	穴太	1	7
8	滋賀里	5	8、9
9	上里	5	10
10	耳原	1	11
11	郡家川西	1	12
12	郡	1	13
13	更良岡山	1	14
14	日下	1	15
15	馬場川	4	16、17、18
16	香山	1	19
17	大柳生ソクダ	1	20
18	阪原門前	1	21、22
19	竹内	1	23
20	西坊城	1	24
21	四分	1	25
22	榎原	12	26
23	観音寺本馬	4	27、28
24	川辺	1	29
25	下佐々 I	1	30、31
26	田井・西川	1	32

記を組み合わせで示した。さらに、このほかの特徴で一群として抽出できるものを単体文のⅥ類として示した。以下に、その分類と概要を示す⁵⁾。

(1) 無頭製品

I類 対向する弧線文のみを持つもので、4例出土している。1条の横位沈線で区画を作り、弧線文を充填するもの(1)、弧線文と2条の横位沈線で作られる細かい区画に刻み目を施すもの(19、24)、弧線文を平面部と側縁部に交互に配置するもの(26)がある。1は弘部野遺跡から出土したもので、出土状況が明らかでないが、後期末葉から晩期前葉に比定されている。26は田井・西川遺跡の落ち込み堆積土から出土したもので、伴出土器は滋賀里Ⅱ式に比定される可能性がある1点を除き、後期末葉の宮滝式や滋賀里Ⅰ式に比定される。19は竹内遺跡出土品で、土器による時期比定は困難である。24は川辺遺跡の包含層から滋賀里Ⅲa～Ⅳ式の土器と共に出土した。I類は概ね後期後葉から晩期前葉に比定し得る資料が多い。

Ⅱ類 斜格子文のみを持つもので、5例出土している。

文様帯の作り方で分類でき、区画線を持たないもの(22-10)、区画線が1条で文様帯が隣り合うもの(8-1、15-1)、文様帯同士の間に細い無文帯を持つもの(2、9-3)がある。22-10は榎原遺跡のものである。調査年代が古いこともあり、伴出土器の特定はできないが、同一調査出土土器は約7割が滋賀里Ⅱ式から篠原式であることが判明している(榎原考古学研究所2011)。9-3は上里遺跡の流路18-1215から出土した。伴出土器は滋賀里Ⅲa式から篠原式中段階であるが、この流路は取水源として使用された後、篠原式頃に投棄場として利用されたと考えられている(京都市埋蔵文化財研究所2010)。多くの小型石棒類は使用後に投棄された状態で出土していると考えられることから、本例は篠原式古・中段階のものと考えられる。従って、Ⅱ類は晩期中葉には確実に存在したと言える。

Ⅲ類 Ⅲ類は斜線文のみを持つものである。4例あり、すべて右下がりの斜線を有し、文様帯同士の間に細い無文帯を設ける。9-1は上里遺跡の流路19-1155から、滋賀里Ⅲa式から篠原式古段階の土器と共に出土している。この流路は、流路18-1215と同じく取水源とし

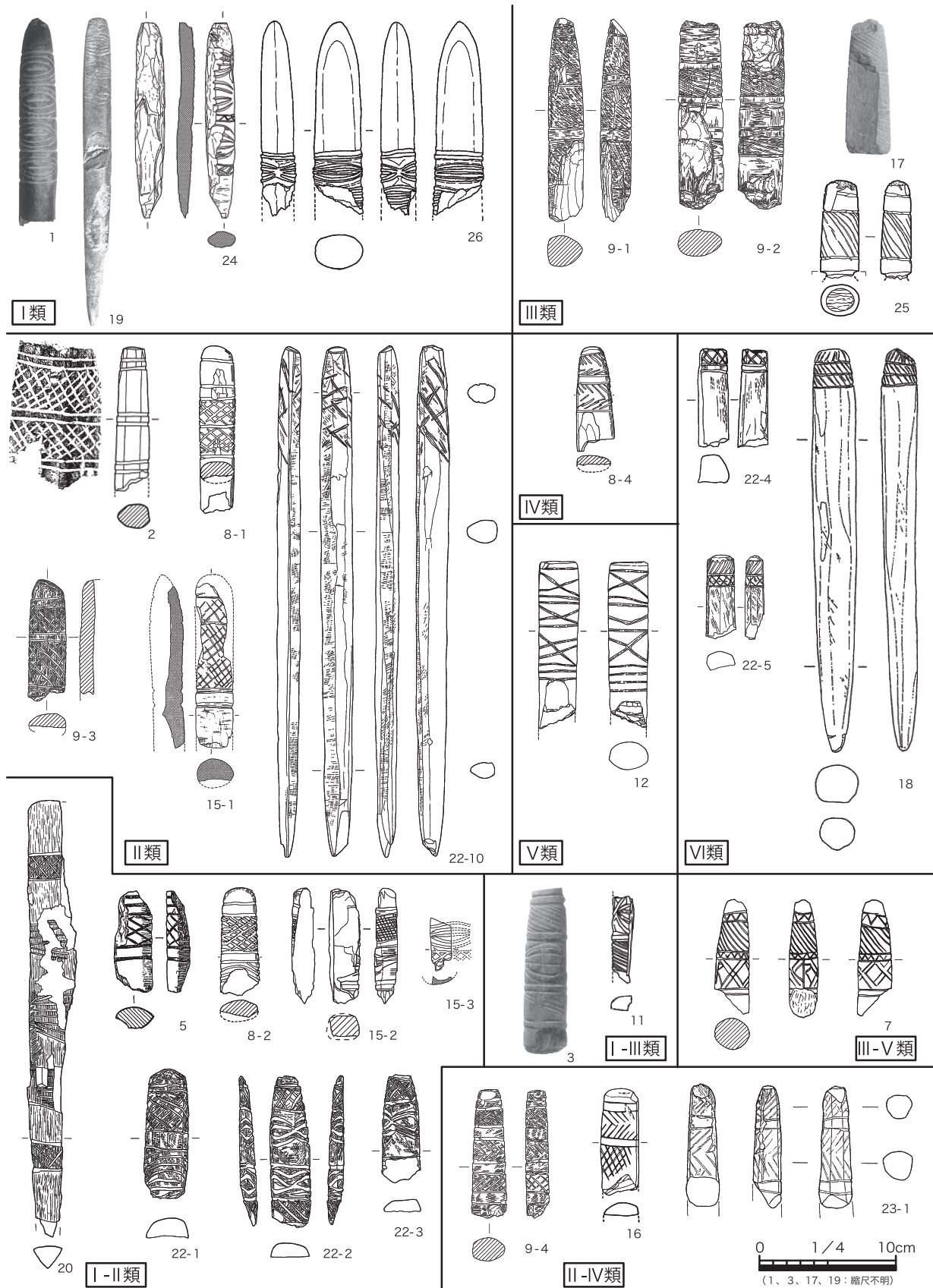


図2 無頭製品における文様の分類

て使用された後、投棄場になったと考えられていることから、篠原式古段階のものと考えられる。9-2 は流路 18-1215 出土のもので、篠原式古・中段階のものである。他は出土状況等が明確でなく、詳細は不明である。

Ⅳ類 矢羽状文のみを持つものである。今回の集成では滋賀里遺跡の 1 例 (8-4) のみ確認した。2 つの文様帯にそれぞれ矢羽状文を施し、文様帯同士の間には無文帯を設ける。Ⅲ D 貝塚黒色砂混泥土層から出土しており、埋没は篠原式以降と考えられる。

Ⅴ類 X 字状の文様を持つものである。郡遺跡の 1 例 (12) のみである。文様帯の作り方は細い無文帯を設ける箇所と設けない箇所があるなど一定でない。各文様帯は上段は両面に X 字文を施し、中段は片面に X 字文が施され反対の面は V 字状の線刻を施す。下段は片面は X 字状文を施し、反対の面は斜格子文状になっている。後世の遺構から出土しており、伴出土器に縄文土器は報告されていない。

Ⅵ類 I～Ⅴ類が、基本的に数条の文様帯を設け、一定の範囲を施文していたのに対し、Ⅵ類は端部付近のみに細い文様帯をつくり施文するものである。3 例確認した。文様は斜線文や斜格子文、X 字状文など多岐に渡るが、いずれも端部から 3 cm 程度の範囲にのみ施文する点で共通する。いずれも単独の出土や出土状況が不明瞭な資料で、土器による時期比定は難しい。ただし、I～Ⅳ類の多くが端部に施文を持たない中で、竹内遺跡出土の I 類 (19) は端部に斜線や弧線が施文されている。このような端部に施文を持つものはいずれも奈良盆地周辺の遺跡で出土しており、何かしら関連性を有する可能性がある。

I - Ⅱ類 弧線文と斜格子文を持つものである。8 例確認でき、今回の分類の中でも最も点数が多い。文様帯が 1 条の区画線で区切られるもの (15-3) と文様帯の間に細い無文帯を挟むもの (8-2、22-1)、弧線文が七宝繋文状になっているもの (22-2、22-3) などがある。20 は西坊城遺跡から出土した。斜格子文と直線的な弧線文で構成され、他の製品に比べて粗雑な印象を受け、施文範囲が広い特異なものである。弧線が七宝繋文状になるものは檀原遺跡でしか確認されず、檀原遺跡に特徴的なものの可能性がある。時期が明確な資料はないが、馬場川遺跡や檀原遺跡など晩期前・中葉を主体とする遺跡から出土している。

I - Ⅲ類 弧線文と斜線文を持つものである。2 例あり、いずれも文様帯間に細い無文帯を持つ。3 は宮司遺跡出土品で、出土土器には凸帯文土器がほとんどな

く、北陸地方の八日市新保式や御経塚式が多い(長浜市史編さん委員会 1996) ことから、晩期前葉のものと考えられる。

Ⅱ - Ⅳ類 斜格子文と矢羽状文を持つものである。3 例あり、いずれも文様帯間に細い無文帯をもつ。9-4 は上里遺跡流路 18-1215 出土で、篠原式古・中段階のものである。23-1 は観音寺本馬遺跡観音寺Ⅲ区の土器溜まり 5 から出土した。宮地氏が晩期中葉の檀原型石刀として指摘した資料である。伴出土器は篠原式古・中段階に限られ、中でも古段階が多く出土している。16 は香山遺跡から出土した。伴出土器は特定できないが、遺跡は篠原式期に盛期を迎えるようである。**Ⅲ - Ⅴ類** 斜線文と X 字状文を持つものである。穴太遺跡から出土した 1 例 (7) のみである。文様帯間に細い文様帯を持ち、そこに鋸歯状文を施す。出土土器から、滋賀里Ⅲ a 式以降のものと考えられる。

その他無頭製品 ここでは、その他の文様構成が明らかな無頭製品を挙げる。

4 は伊吹遺跡出土の石剣である。完形品で各所に斜格子文や矢羽状文、弧線文を用いた施文がされる。不時発見で、縄文土器は中期の船元式とみられる破片が出土しているが、一緒に須恵器等も出土している。細い文様帯を端部以外にも持つなど、他の無頭製品と比べても特異な文様構成をしている。

8-5 は、滋賀里遺跡から出土した。京都大学による 1948 年調査の際に出土したものである。他の無頭製品が基本的には文様帯を 2 ないし 3 つ持つのに対し、5 つの文様帯を持つ点で類がない。各文様帯は無文帯を挟まず隣り合う。上下端の文様帯はやや細い。斜線文、対向弧線文、斜格子文、矢羽状文の 4 種類の文様

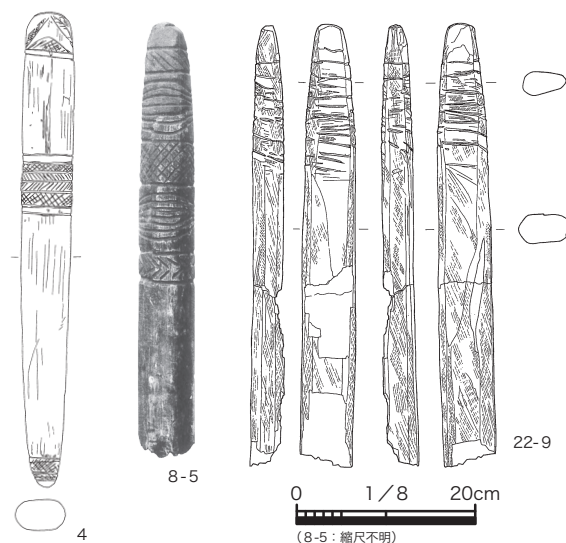


図3 その他無頭製品

が施文されている。出土状況は明らかでないが、当時の調査では滋賀里Ⅲa式が多く出土している（家根1981）。

22-9は檀原遺跡から出土した。文様帯を区画せず、横位沈線を多数刻み込むものである。詳細な時期はやはり不明だが、横断面が定形化していないことから無頭製品の中でも古相のものの可能性が考えられる。

（2）有頭製品

近畿地方で出土した有文有頭製品は6点である。6は麻生遺跡から出土した。截頭円錐型の頭部に横位沈線を7条刻む。遺跡内で出土した土器は五貫森式や馬見塚式で、晩期後葉に位置付けられる。13は、更良岡山遺跡から出土した。球形の頭部に2条の横位沈線で区画を作り、その中にX字文を横位に連続施文する。出土位置が明らかでなく、調査では後期前葉の中津式土器などが出土しているのみである。14は日下遺跡で出土した。円柱形の頭部に三叉文を彫り込む。戦前に採集されたもので詳細は不明である。21は四分遺跡から出土した。頭部にX字文を両側面に施す。同調査で出土した縄文土器は晩期のもので、凸帯文土器が多い。23-2、3は観音寺本馬遺跡のものである。23-2は観音寺Ⅰ区土器溜まり2から出土した。横断面の長さが5cm以上あり、小型石棒類の基準を超えているが、精製品であることも考慮して小型石棒類の範疇に含めた。円柱形の頭部に横位に連結するI字状の線刻で隅丸方形の区画をつくり、区画内に1条の横位沈線を刻む。篠原式中・新段階のものである。23-3は観音寺Ⅰ区土器溜まり8から出土した。扁平な頭部にX字文を両側面に刻み、それにより区画された部分に横位沈線を1条ずつ刻む。篠原式中・新段階のものである。

4. 小型石棒類における文様の変遷

（1）遺跡間の検討

今回の資料から最も状況が明確なのは晩期中葉である。Ⅱ-Ⅳ類は概ね篠原式中・新段階のものと特定でき、上里遺跡の出土状況から、Ⅱ、Ⅲ類が晩期中葉に存在したことも明確である。一方で、伴出土器から確実に晩期前葉と特定できる資料は認められない。そこで注目されるのは資料の時期が晩期中葉に限定される上里遺跡と、晩期前・中葉を主体とする檀原遺跡での文様傾向の差である。上里遺跡では、Ⅱ、Ⅲ、Ⅱ-Ⅳ類の3種が認められ、檀原遺跡は、Ⅰ、Ⅵ、Ⅰ-Ⅱ類が認められる。両遺跡の違いは、檀原遺跡のみに対向

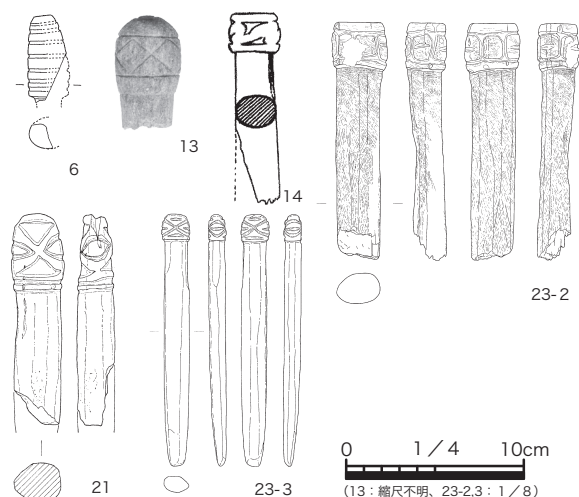


図4 有文有頭製品

弧線文を伴うⅠ類やⅠ-Ⅱ類、端部のみ施文を持つⅥ類が認められることである。すなわち、これらの資料は、晩期前葉のものと考えられる。また、同じくⅠ-Ⅱ類が出土した馬場川遺跡や滋賀里遺跡の資料をみると、どちらも文様帯間に細い無文帯を持たない資料（8-1、15-3）が存在する。これら無文帯を持たない資料は、晩期中葉の資料には認められないことから、晩期前葉に限定される可能性が高い。この点から、1も晩期前葉に位置付けられ、Ⅰ類は晩期前葉に存在したと考えられる。従って、晩期前葉には少なくともⅠ、Ⅱ、Ⅵ、Ⅰ-Ⅱ類が存在したと考えられる。

（2）無頭製品における文様の変遷

以上の検討を踏まえ、無頭製品における文様は次のように変遷したと考えられる。

今回扱った資料の中で、後期に遡る可能性が高いのはⅠ類の26である。伴出土器に晩期前葉の土器が少数含まれていることは留意されるが、大半は後期後葉のものである。弧線文を平面部と側縁部に交互に配する形は、他のⅠ類と大きく異なるものの、弧線文が小型石棒類において先行して用いられるようになったこと、後期末葉には文様を持つ小型石棒類が存在した可能性を示している。

晩期前葉については、Ⅰ、Ⅱ、Ⅵ、Ⅰ-Ⅱ類が存在する。弧線文は後期末葉から継続し、新たに斜格子文を施すものや、端部のみ施文するものが出現する。既にⅠ類が先行して存在することから、単体文の製品が先行して発生し、それを組み合わせることで複合文の製品が発生すると考えられる。従って、出現の順番としては、Ⅰ→Ⅱ→Ⅰ-Ⅱ類と推測されるが、どの程度の時期差を持つかは明らかでない。また、後述する晩

— 159 —

期中葉と異なり、文様帯間に細い無文帯を持たない資料が数点確認できる。晩期前葉のうちに無文帯を持つよう変化し、晩期中葉までにはそれが完全化されたと考えられる。Ⅵ類は端部に施文を持つ点でⅠ類の19と共通し、晩期前葉の資料の一部にこのような端部施文を持つものが含まれるとみられる⁶⁾。

このほか、Ⅰ～Ⅲ類も晩期中葉の資料に認められないことから、現状では晩期前葉に帰属するものと考えられる。これに従ってⅢ類も同時期には既に出現していた可能性が高い。さらに、滋賀里遺跡の8-5は、Ⅰ～Ⅳ類の単体文全てを包括しており、他に例がないが、文様帯間に細い無文帯を持たない点、弧線文を持つ点、8-5が出土した調査では滋賀里Ⅲa式が多く出土している点から、現状では晩期前葉のものと認定したい。よって、矢羽状文の出現は晩期前葉にまで遡ることになり、単体文Ⅰ～Ⅳ類は晩期前葉には出現していたと考えられる。

晩期中葉は、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅱ～Ⅳ類が確実に存在する。新たに斜格子文と矢羽状文を組み合わせたⅡ～Ⅳ類が出現する。一方で、Ⅰ類をはじめとする対向弧線文を持つ文様は認められない。また、晩期後葉に帰属する文様を持つ小型石棒類は認められず、晩期中葉で有文無頭製品は消滅したと考えられる。

現状で晩期前・中葉のいずれに帰属するか判断しきれぬ文様はⅤ類(12)やⅢ～Ⅴ類(7)である。7は無文帯が鋸歯状文で加飾され、細い文様帯として顕現するものである。同様の細い文様帯を持つものとしては、Ⅰ類の19や24があるが、文様帯を区切るような規則的な配置がされていないことは留意される。Ⅵ類との関連も想定できるが、Ⅲ類の出土時期もあくまで推測に留まり、Ⅴ類も位置付けが難しく、構成文様の出現時期がいずれもはっきりとしない。現状では晩期前・中葉の資料として扱うに留める。

以上のような課題は残るものの、近畿地方において無頭製品の文様は図5のような変遷を辿ると考えられる。

(3) 有文無頭製品の終焉と有文有頭製品の出現

以上の文様の変遷で示した通り、有文無頭製品の終焉は晩期中葉と考えられ、晩期中葉でも後半と考えられる。ここで注目されるのは、観音寺本馬遺跡での有文製品の出土状況である。有文無頭製品と有文有頭製品がそれぞれ異なる土器溜まりから出土しており、伴出ししない。伴出土器は篠原式中段階が重複しているため、断言はできないものの、両者は同一時期に存在し

なかった可能性が指摘できる。いずれにしても、晩期中葉のある段階で有文無頭製品は終焉を迎え、これに前後して有文有頭製品が出現したようである。この有文有頭製品は6のように晩期後葉のものがあり、晩期後葉まで少数ながら継続するようである。6は横位沈線を7本配した単純なもので、全体資料数が少ないものの加飾性は減じているような印象を受ける。また、X字文や方形の区画文を持つ装飾性の高いものは奈良盆地南部に集中して認められる。

おわりに

以上、近畿地方における小型石棒類の文様の変化を示した。更なる検討が必要な箇所もあるが、現在可能な限りの文様変遷を示せたと考えている。この結果、無頭製品では後期後葉に対向弧線文を持つものが出現していた可能性が指摘できた。また、これまで晩期前・中葉の製品が一括の時期のものとして扱われることが多かったが、明確に文様構成が変化していることも明らかになった。特に、晩期中葉に矢羽状文が台頭し、一方で、対向弧線文は消失するなど、晩期前葉の文様構成から大きく変化している点は注意される。細部では、晩期前葉のある段階で、細い無文帯を配する文様構成が成立した可能性が高い。このような変遷を経て、晩期中葉を最後に有文無頭製品が姿を消す。寺前氏が讃良郡条里遺跡の資料を基に指摘するように、晩期後葉にも横位沈線のみを持つ小型石棒類が存在することは確かなため、厳密な意味での榎原型石刀は晩期後葉まで継続した可能性があるが、本論で扱った複雑な文様を持つものは晩期中葉までのものと言ってよい。そして、有文無頭製品の消滅と前後して、有文有頭製品が出現する。ただし、無頭製品と比べればその量は圧倒的に少ない。

榎原式文様との関連性については、従来指摘があった通り、有文小型石棒類が榎原式文様終焉以降も継続することは明らかである。晩期中葉において無頭製品で盛行する文様は、斜格子文や斜線文、矢羽状文であり、榎原式文様の特徴である三角形剝込文やこれに類する文様は持っていない。一方で、晩期前葉に対向弧線文を持つ資料が限定される点は、榎原式文様の消長と合致する。榎原型石刀と榎原式文様との関連性は、その点で指摘できるが、土器における榎原式文様の消滅後にこれを保持したかという点については更なる検討が必要である。一方で、晩期中葉に近畿地方に出現する有文有頭製品は注意される。23-2のように沈線で隅丸方形の陽刻部を作り出すものがあり、楕円形の

陽刻部を作り出す櫃原式文様と共通点を持つとも解釈できる。当該製品と櫃原式文様は時期的な隔たりを有するが、これら有文有頭製品は、後藤氏の型式分類で言う「小谷型石刀」であり、晩期前・中葉の東海・北陸地方で盛行するものである（後藤 1986）。小型石棒類の文様と櫃原式文様の関係や、より細かな小型石棒類の文様変遷を探るには、東海・北陸地方の資料を踏まえた検証が必要である。その際も器種間における文様の類似が、直ちに同一のものを指すわけではないという立場は保持した上で検証する必要がある⁶⁾。

謝辞

本稿は平成 30 年度及び令和 2 年度に立命館大学文学部・大学院文学研究科に提出した卒業論文・修士論文の一部を加筆修正したものである。卒業論文・修士論文執筆にあたっては、矢野健一先生、木立雅朗先生、高正龍先生、長友朋子先生にご指導いただいた。また、関西縄文文化研究会において発表の機会を頂き、数々のご指摘・ご指導をいただいた。資料の実見等にあたっては、櫃原考古学研究所、京都市埋蔵文化財研究所、滋賀県文化財保護協会、東大阪市教育委員会のお世話になった。末筆ながら、記して感謝いたします。

注

- 1) 「直径 3cm 前後、長さ 30～60cm 程度の石棒で文様などが全く施されていない」（後藤 1986）
- 2) 後藤氏は櫃原型石刀を a 類、b 類に分けて示している。b 類は主に九州地方で確認できるものである。本稿では煩雑になるため、櫃原型石刀 a 類を指して「櫃原型石刀」と称する。
- 3) 把頭がほぼ球形を呈するもので、刀身断面形態が II Aa（稜と反対の側縁が曲面で結ばれる）のもの（後藤 1986）
- 4) 図 1 に示した遺跡番号は、以降で示す資料番号と共通している。弘部野遺跡のように、対象資料が 1 点のみであれば、遺跡番号のみを付した。滋賀里遺跡のように、対象資料が複数ある場合は、「8-1」のように、遺跡番号の後ろに番号を付した。また、以降の図で示す資料の実測図、写真はすべて出典資料から引用した。
- 5) 本稿で示す分類は、あくまで文様の分類するにあたって便宜的に示したものである。型式としての設定にはさらなる要素の検証が必要であり、小型石棒類は製作遺跡毎に製作する型式が異なることが明らかになってきており（長田 2012）、製作遺

跡の資料に基づいた型式設定が行われる必要がある。

- 6) 竹内遺跡と川辺遺跡の出土遺物の類似性から、2 遺跡は同一の集団による集落だったか、同じ文化圏下にあった可能性があるとの指摘がある（黒石 1999）。これに従えば、弧線文に細い文様帯を伴う形態は、地域的な特徴として示される可能性がある。
- 7) 杉山寿栄男は、東北地方の石刀の柄部文様について、土器との共通性を指摘した。その際に、若干の文様の違いがあるのは、施文する対象が異なることで、表現が規制された結果であるとしている（杉山 1927）。たしかに同じ文様を意識した集団によるものと考え、多少の違いを同様のものとして扱うべきかもしれないが、その違いをどこまで許容するかは慎重な検討が必要である。

引用文献

- 秋山浩三 1991 「縄文時代石刀の変遷～京都府瑞穂町中台遺跡の採集例をめぐって～」『京都考古』第 62 号 京都考古刊行会 pp.1-7
- 泉 拓良 1985 「縄文時代」『図説 発掘が語る日本史』第 4 巻近畿編 新人物往来社 pp.80-83
- 大塚達朗 1995 「櫃原式紋様論」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』13 東京大学文学部考古学研究室 pp.79-141
- 大野雲外 1908 「石剣の形式に就て」『東京人類学会雑誌』第 23 巻第 263 号 東京人類学会 pp.164-167
- 長田友也 2012 「石棒の製作と流通」『季刊考古学』第 119 号 雄山閣 pp.79-84
- 黒石哲夫 1999 「川辺遺跡の縄文時代晩期の遺構と遺物について - 紀ノ川下流の縄文時代晩期の集落跡 -」『紀伊考古学研究』第 2 号 紀伊考古学研究会 pp.39-48
- 後藤信祐 1986 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究（上）」『考古学研究』33 巻 3 号 考古学研究会 pp.31-60
- 後藤信祐 1987 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究（下）」『考古学研究』33 巻 4 号 考古学研究会 pp.28-48
- 杉山寿栄男 1927 『日本原始工芸図版解説』 工芸美術研究会
- 寺前直人 2018 「弥生時代小形石棒類の型式学的研究」『待兼山考古学論集Ⅲ』 大阪大学考古学研究室 pp.119-140

鳥居龍蔵 1924「石棒」『諏訪史』第1巻 信濃教育会
諏訪部会 pp.93-98

幡中光輔 2010「大型石棒から小型石棒類へ－近畿地方における石棒祭祀の転換と社会背景－」『縄文時代の精神文化』（第11回関西縄文文化研究会資料集）
関西縄文文化研究会 pp.23-34

宮地聡一郎 2017「西日本縄文晩期土器文様保存論－九州地方の有文土器からの問題提起－」『考古学雑誌』第99巻2号 日本考古学会 pp.1-50

家根祥多 1981「晩期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器Ⅱ 雄山閣 pp.238-248

八幡一郎 1933「石刀の分布」『人類学雑誌』48巻4号 日本人類学会 p.233

八幡一郎 1934「石棒、石剣、石刀」『北佐久郡の考古学的調査』 信濃教育会北佐久教育部会 pp.64-70

資料出典

- 1 小林青樹編 2001『縄文・弥生移行期の石製呪術具2』（考古学資料集17）
- 2 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1984「北仰西海道遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅺ-2』
- 3 長浜市史編さん委員会編 1996『湖北の古代』（長浜市史1）長浜市
- 4 伊吹町教育委員会 1992「伊吹遺跡」『伊吹町内遺跡分布調査報告書』
- 5 小林行雄・藤岡謙二郎・中村春壽 1938「近江坂田郡春照村杉澤遺跡－縄文式土器合口甕棺発掘報告－」『考古学』第9巻第5号 東京考古学会
- 6 滋賀県教育委員会文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会 1987「麻生遺跡」『ほ場整備関係遺跡調査発掘報告書ⅩⅣ-5』
- 7 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1996『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 8 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』
- 9 滋賀里資料研究会編 2023『滋賀里遺跡資料図譜』真陽社
- 10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010『上里遺跡Ⅰ』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊）
- 11 茨木市教育委員会 1982『耳原遺跡発掘調査概報』
- 12 高槻市 1977『高槻市史』第1巻 本編Ⅰ
- 13 茨木市教育委員会 1993『倍賀遺跡発掘調査概要

報告書』

- 14 四条畷市教育委員会 2000『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』
- 15 藤岡謙二郎 1942「中河内郡孔舎衛村日下遺跡」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第12輯
- 16 松田順一郎 1986「馬場川遺跡の石刀・石棒」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.2 No.2 東大阪市文化財協会 pp.1-8
- 17 東大阪市教育委員会 2010『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成21年度－』
- 18 東大阪市教育委員会 2011『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成22年度－』
- 19 香山遺跡発掘調査団 1991『香山Ⅱ』（新宮町文化財調査報告14）新宮町教育委員会
- 20 奈良県立橿原考古学研究所 1999「大柳生遺跡群第7・8次」『奈良県遺跡調査概報1998年度』第1分冊
- 21 奈良県立橿原考古学研究所 1992「阪原門前遺跡」『奈良県遺跡調査概報1991年度』第1分冊
- 22 松田真一 2017『奈良県の縄文遺跡』青垣出版
- 23 奈良県立橿原考古学研究所 1977「竹内遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1976年度』
- 24 奈良県立橿原考古学研究所 2003『西坊城遺跡Ⅱ』（奈良県文化財調査報告書第90冊）
- 25 奈良国立文化財研究所 1980『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』
- 26 奈良県立橿原考古学研究所 2011『重要文化財橿原遺跡出土品の研究』（橿原考古学研究所研究成果第11冊）
- 27 奈良県立橿原考古学研究所 2013『観音寺本馬遺跡Ⅰ』（奈良県立橿原考古学研究所調査報告第113冊）
- 28 奈良県立橿原考古学研究所 2017『観音寺本馬遺跡Ⅲ』（奈良県立橿原考古学研究所調査報告第121冊）
- 29 財団法人和歌山県文化財センター1995『川辺遺跡発掘調査報告書』
- 30 野上町誌編さん委員会 1985『野上町誌』上巻
- 31 仲原知之 2009「紀伊風土記の丘寄贈・寄託の石棒類」『紀伊風土記の丘年報』第36号 和歌山県立紀伊風土記の丘
- 32 財団法人和歌山県文化財センター2007『田井・西川遺跡』